

■第 20 回「哲学系読書会(仮)」

■課題図書：G・バタイユ『呪われた部分 全般経済学試論\*蕩尽』（酒井健訳・ちくま文芸文庫）一部、第二部

■報告：山本（M）

■日時：2022 年 07 月 26 日（火）18 時半より 21 時まで

■会場：京橋・レンタル・スペース

呪われた部分 全般経済学試論\*蕩尽

ジョルジュ・バタイユ（1897-1962）

ミニユイ社初版1949年刊行

まえがき

・私が書いている本は、経済学の専門家のやり方で事実を考察しているのではなく、人間の供儀、教会の建設、宝石の贈与が小麦の販売と同じほど重要性を持つ、そういう視点に立っている。 p011

・《全般経済学》とは、生産より富の《消費》（つまり蕩尽）の方を、重要な対象とする経済学のことである。 p012

・この第一試論は、特殊な学問領域の外に出て、ある問題に取り組んでいる。・・・学問の各分野が地球上のエネルギーの動きを考察して提起する個々の問題すべてを解く鍵として提起される問題なのである。 p013

（心理学や哲学も、経済の根源的な問題と無関係ではない。芸術、文学もこの動きと関係する。）

・この動きとは、超過エネルギーの動きであり、沸騰する生の場面に現れる動きである。地球を活気づけているこの沸騰は、私の沸騰でもあるのだ。

・私の研究は、当初、人間の知的資源全体の拡大を目指していた・・・その成果が私に教えてくれたのは、・・・得られた知の蓄積は、不可避な支払い期日を前にしての支払い猶予に過ぎないということ。 p014

・書物を書きながら私自身、自分のエネルギーと自分の時間を浪費ではなく仕事のために使っていた。 p015

（浪費という）この真実を書き続けることができなかった。 p015

・（私が読者に提供するものは、誰も待望していない本、どの経済学の問題にも答えていない本、奇妙な本なのである。）

・期待に背を向けたからこそ、私は、この極端に自由な思想を持つことができたのだ。（世界の自由な動きに諸概念を対応させる思想） p016

・力の戯れの次元に思想を置く => 「真実が現れる視界」において、「生物と人間に根本的な問題を提起しているのは、必要性ではなく、《奢侈（贅沢な浪費）》だという命題」が真の意味を帯びてくる。

・（第一巻の本書では）残念なことに《生産的消費》と《非生産的消費》という概念が本書の議論すべてにおいて根底的な価値を持ってしまっている。・・・生のすべての様相を秩序立って記述することこそ行うべきなのだ。 p017

・私は、「ケインズの瓶」の謎を解き明かす様々な理由を大きな視点で呈示してみたかった。食、死、有性生殖と言ったエネルギー横溢の骨の折れる迂回路を辿って、この呈示を試みたかったのだ。・・・（断念したのではない）未来に先送りしているだけである。 p018-p019

（ケインズの瓶：大蔵省が紙幣をいっぱい廃鈔に埋め、民間企業に掘り起こさせる。この採掘作業が失業対策になり、紙幣の浪費を上回る経済効果を生む）

・不安の分析を論述することも、・・・延期している。（不安の分析は、二つの政治的方法の対立を鮮明に際立たせる => 不安に駆られた解決方法と、精神の自由からなる方法 [地球全体の生の資源を念頭に置く]) p019

・「本書は政治的提案へ向かっている」が、「その提案の意義は・・・不安に捉われない明瞭な

態度に関係している」。p020

## 第1章 全般経済学の意義

### 第1節 経済は地球上のエネルギーの流動に依存している

・(タイヤや葡萄畑は世界の一部なのに)人は「全体のことを考える必要に駆られずに・・・(タイヤ交換などの)作業を全うすることができる」。p025

・しかしアメリカの自動車生産のような大規模な経済活動全般が考察の対象になってくると、事情は一変する。さらに経済活動全般が対象になればなおのこと、事情は一変する。p026

・人間による生産と消費の体系を、より広大な全体の内部にある体系として考察すべきではあるまいか。p027

(「経済の動きはアカデミズムの枠を越えてしまうので」、次々と問いが生じる。次のような。)

・産業の発展の全体のなかには、社会間の紛争、その結果としての地球規模の戦争が含まれているのではないだろうか。

つまり、・・・人間の地球全体での活動の中には、経済の全般的データを研究してはじめて現れてくる原因と結果があるのではなかろうか。

・まず全般的な帰結を捉えたいうえではなければ我々は、経済というこれほど危険な活動の主人にはなれないのではないだろうか。(経済を発展させるのならば)地球上のエネルギーの動きに関係した全般的な問題を提起すべきなのではあるまいか。

### 第2節 体系の成長に役立ちえない余剰エネルギーを、利益を求めずに、消費する必要性について

・地球の表面では、ある動きが生じている。その動きは、この地球上という一点での宇宙のエネルギーの流動に起因している。人間の経済活動は、この動きを取り入れる。つまり人間の経済活動は、この動きに起因する様々な可能性をいくつかの目的に差し向けて活用するということなのだ。p028

・人間の活動はこの全般的なエネルギーのあり方を認知せず、無視。

・(人類は、自分たちの生産活動のために、このエネルギーを活用するという目的を設定しているが)人類の活動は、我々の身近な目的を越えて、宇宙の無益で無限の自己実現の後を、知らず追いかけているのだ。p029

・根本的な事実

地球上のエネルギーの動きが決定している状況において、生命体は、原則として、生命の維持に必要なエネルギーより多くのエネルギーを受け取っている。

この超過エネルギー(富)は一体系(たとえば一生命体)の成長に使用される。

もしもこの体系がもうこれ以上成長することができなくなったならば、あるいはまたこの体系の成長に完全に使用されなくなったならば、利益を求めずにこの超過分を消費することが必要になってくる。p030

### 第3節 限定された生命体および集団の貧しさと、生きた自然の富の過剰

・生産力を増すことこそが人間の活動の理想的な目的だとする考えに慣れてしまっている人々は、「惜しみなく消費しなければならないといった考え」や「収益を無益に浪費することだけを決然とめざすといった考え」を拒否する。・・・合理的な経済を支える判断に逆行するからだ。p030-031

・もしも地球上の生産的な富の全体を視野におさめて考えてみるならば、生産された物が生産的な目的に使用されるのは、この生命体、つまり経済的な人類が、設備を増大させうる限りのことでしかない。つまり、全部使用されることもなければ、つねに使用されることもなく、無限定に使用されうるということでもないということだ。p031

・超過は、収益にならない操作を介して消尽されねばならないということである。p032

・経済学は、経済的人間の目的という限定された目的のためになされる諸操作に対象を限定して

いる。経済学は、いかなる特殊目的にも限定されないエネルギーの活動を考慮することができない。このエネルギーの活動とは、陽光の動きに捉えられ影響を受けている生物全般の活動のことだ。

・生物全般にとって、地表のエネルギーはつねに過剰な状態であり、問題はいつも「奢侈」に関連した言葉で提起される。

・人間は、生物エネルギーの体外表出（つまりエネルギーの浪費）の全般的な動きに活気づけられている。・・・生命界の頂点という至上の立場さえもが人間をこの表出の動きと同じ存在にさせてしまう。p033

・（だが）この至上の立場は人間を特権的に世界全般の栄光の操作へ、無益な消費へ、差し向けるのだ。

・「欠乏への意識」、「貧しさへの意識」のおかげで、人間は、このように世界へ差し向けられることを拒んでいるのだが、・・・地球上のエネルギーの動きをいささかも変えられない。（エネルギーは生産力という枠組みのなかでは無制限に増大しない。最終的にはエネルギーは我々から離れていく。）

#### 第4節 戦争は大惨事という仕方での超過エネルギーの消費とみなされる

・我々が世界全般のエネルギーの動きを無視したところで無益な消費というエネルギーの動きの最後のあり方になんら変化は生じない。p034

・我々が生きているこの大地は、多様に増大する破壊行為のための領野に過ぎないのだ。

・知らずにいると、我々は、自分たちを心地よくしうる世界のエネルギーの表出のあり方を選ぶことができなくなる。

・超過エネルギーこそが、調教できない無垢の動物のように、我々を破壊するのである。（避けがたい爆発の犠牲になる。）

・（生き生きした力の過剰による）充血を緩和する方法が、どの時代においても、・・・熱狂的な探究の対象になったのだ。古代社会はこの方策を祭りのなかに見出した（また、役に立たない荘厳なモニュメントの建築など）。我々は、余暇の時間を増やして超過エネルギーの一部を解消させようとしている。p034-035

・だがこうした回避策はいつも不十分なのだ。（エネルギーが？）超過して存在しているがゆえに、いつの時代も、戦争という破壊行為へ無数の人間と大量の有益な財が差し向けられてきたのである。

（産業の飛躍的な発展によって、近年、戦争の重要度が増した）

・近代産業の発展は、1815年から1914年までのあいだ、相対的に平和をもたらした（ナポレオン帝政の終わりから、第一次対戦の勃発まで）。だが技術革新による増産はやがて困難になる。増産それ自体が超過エネルギーの増大をもたらすようになった。p035-036

・この過剰の膨大さこそが、二つの戦争（二つの世界大戦）をとてつもなく激しいものにした。p036

・超過エネルギーは無益に消費されねばならないという全般的な原則は、経済を超える動きの結果として考察されると、これまでの事実の全体を悲劇として明示し、それとともに、だれも否定することのできない重要性を帯びてくる。

・それゆえ我々は、すでに脅威になりつつある三度目の戦争を回避する希望をはっきり語ることができるようになる。

・そのためには我々は、過剰生産を、困難に陥っている産業の生産の合理的な拡大に注ぎこむか、あるいはまた、エネルギーをまったく蓄積せずにとだ非生産的に浪費する事業に注ぎこむか、いずれかの方法を取らねばならない。

・（これは多くの問題、複雑な問題を引き起こすが）解決の重要性それ自体に意義を差し挟むことはできないはずだ。p037

・成長の拡大それ自体が、経済原則の転倒を要請しているということである。

・限定的な経済の展望から全般的な経済の展望へ移るということは、まさしくコペルニクスの転回を、つまり思考-そして倫理-の逆転を、実現するということなのだ。

・「商品を代償なしに譲渡するということ」も「不可避なことにさえなってくる」。・・・成長を追求する可能性も、贈与に従属するということになっていく。

・アメリカ人が、・・・利益なしの操作の余地を持たねばならないと明晰に理解することが必要。

・（宇宙のエネルギーの原則を）無視したらたいへんな結果が待っているのだ。p038

## 第2章 全般経済学の法則

### 第1節 生命化学エネルギーの過剰、および成長

・原則として一個の生命体は生を保証する操作に必要な分量よりも多くのエネルギーを保有している。p039

・もしも植物や動物が超過エネルギーをふだん保有していないならば、成長も生殖も可能にならない。

・生物の原理：エネルギーを無益に消費したあとで、過剰エネルギーを受け取り、そしてこれをまた産出していく

・動物は成長を保証する超過エネルギーを持っている。やがて成長の速度が遅くなって、・・・もはや成長によって消費されないときがやってくる。・・・性の成熟に達する。・・・ある面で生殖は、個体の成長から一集団の成長への移行を意味している。（バタイユは子牛の例で説明：成長と共に体重が増える。その後、性の成熟に達する。）

・植物も動物と同じ過剰を表している。・・・植物の場合はその全体が成長であり生殖なのだ。p041

### 第2節 成長の限界

・決定的な重要性を持つ事実：太陽エネルギーは繁殖する生の発展の原理だというのがこの事実p041

・太陽は何も受け取らずに与えているのだ。

・（かつて）人々は、太陽に属する栄光を、代償を得ずに与える人の行為に結びつけていた。p042

・道徳的価値判断の二つの根源：かつて価値は非生産的な栄光に与えられていた。今日では、生産の程度に価値が与えられている。エネルギーの無益な消費よりもエネルギーの獲得の方に価値が置かれるようになった。

・[今日の]栄光は、栄光の行為の結果が役に立っているという有用性の価値判断のなかで正当化される。

・しかし、古風な感情は、（実利的な判断、キリスト教道徳によって鈍らされたとはいえ）今なお生きている。この感情は、とりわけブルジョワ世界に対するロマン派の抗議の中に見出せる。

・太陽の光は地球上にエネルギーの過剰をもたらす。・・・本当の超過は、個体あるいは集団の成長がひとたび限界に達したとき始まるのだ。p043

・結局、地上の空間の広さが地球規模の成長の限界になっている。

### 第3節 圧力

・多様な形態の生命がこの地表の生命を全体として取得可能な資源とみなしてわが物にしている。その結果、この地表の空間が生命の根本的な限界になっている。p043-044

・もしも人が空いた空間を増やすのならば、この空間は隣の空間と同じように生命によってすぐに占められることになる。（周囲の生命の圧力による）p044

・あまりに近くに限界が設定されると生はいわば窒息状態になる。成長はもはやそうした状況では不可能であるのに、生は様々な仕方でも成長を渴望するようになる。p045

・この激しい繁殖の力は、爆発寸前の限界に向かう動き、何度も繰り返すそこまで行く動き、そんな動きへ流れ出すのだ。

・こうした状況の結果は、なかなか考慮の対象にならず、我々の計算に組み込まれることがない。（我々は自分の利害を計算するが、「利害」という言葉は、（生の）「欲望」と矛盾してい

るからだ)

- ・我々は、合理的に行動しようとするときに我々の行為の有用性を考えなければならなくなる。有用性は、現状維持なり増加なり、利点を前提にしている。
- ・たしかにこの繁殖を増加へ利用することはできる。だがこの問題に直面すると、人は増加への利用を断念しなければならない。
- ・沸騰状態のエネルギーを消耗することと利用することとは明らかに異なる。（「前者はまさに出血、正真正銘の消失」であり、「これはどの道起きる」） p046
- ・このような不可避な消失はどうあっても有用だとはみなされない。（しかし）「意にかなった快適な消失」であり、もう一つの不快な消失より好ましい消失なのだ。（訳者によれば戦争のような消費ではない消費）

#### 第4節 圧力の最初の現象：拡大

- ・このように生じる圧力を正確に定義し表現するのは難しい。
- ・（闘牛を見たい大群衆が小さな闘技場に押し寄せてくる光景を想像してほしい）生命の様々な可能性は無限に実現されるわけではないのである。空間によって制限されている。 p047
- ・地球はまずはじめに基本的な空間として水域と地表を生命に提供した。しかし、（闘技場へ入れない人々が木々や電信柱によじ登るように）生はすぐに空中を奪い取ることに向かう。

#### 第5節 圧力の第二の現象：浪費あるいは奢侈

- ・場所が十分でない場合、別の結果が生じる可能性がある。競技場の入り口で戦いが始まるかもしれないのだ。 p048
- ・死者が出ると、座席数に対する個人の数の過剰は減少するようになる。
- ・この現象は、自然界においては、実に様々な形態で生じる。最も目立った形態は死だ。
- ・圧力は、いたるところで同じである場合、休息に達する。・・・（しかし）現実の圧力は、多様で不均一な有機体を競合させるのだ。 p049
- ・生物においては圧力が不均一であるために、成長が可能になるのである。つまり死によって空いた場所ができ、そこで成長が可能になるということだ。新たな空間が問題なのではない。
- ・生全体を考察してみると、実際には成長はなく、全体の維持があるばかりなのだ。言い換えると、成長は、破壊が行われたあとの埋め合わせとして可能だということである。
- ・地球全体において成長はなく、あるのはただ、エネルギーの贅沢は浪費がじつに多様なかたちで生じているだけなのだ！・・・主要な出来事は、奢侈の発展、どんどん豪華になっていく生の諸形態なのだ。 p050

#### 第6節 自然界の三種の奢侈：食、死そして有性生殖

- ・同じ種が相互に食べ合うというのがもっとも単純な奢侈の形態である。
- ・一般的に言って、植物の方が動物の生よりも効率がいい。植物はまたたく間に空間を占めてしまう。動物はその空間を、互いに殺しあう殺戮の場にして、この空間の生の可能性を拡大していく。
- ・猛獣による継続的な略奪行為は、莫大なエネルギーの浪費を表している。
- ・食は死をもたらす。ただし偶発的なかたちで、である。考えうる奢侈すべてのなかで、死こそは、逃れられない運命という在り方で、間違いなく最も高くつくものになっている。
- ・動物の肉体のもろさ、その複雑さは、死の奢侈な意味をすでに物語っている。
- ・死は、新生児がこの世に到来できるようにと絶えず場所を提供しているのだ。その意味で我々が死を呪うのは間違っている。死がなければ我々は存在できないのだから。
- ・死を呪うとき、我々は自分の死のことだけを恐れているのだ。我々の意志が恐怖しているのだ。 p051-052
- ・我々の存在は贅沢な増殖の動きの際立った形態にほかならないというのに、我々は、この動きから逃れることを夢見て、自分をだましている。 p052
- ・我々は、まず自分をだますのだが、これはその次に、意志を意識の厳格な極限へ導くことに

よって、意志の厳格さをもっと強烈に試すためなのだ。

・死の奢侈は（性の奢侈と同じように）、最初、我々自身への否定と捉えられてしまうのだが、次いで突然の反転が生じて、生がよく示す動きの深い真理と捉えられるようになるのだ。

・現在の状況では、有性生殖は、我々の意識とは関係ないままに、食と死とともに、エネルギーの強烈な蕩尽を実現する大きくて贅沢な回り道の一つになっている。（個体の誕生と成長を介して世界全体のエネルギーに達する＝回り道）

・（最初の段階の有性生殖が告げるのは）個の存在が、自分自身のための成長を断念し、個体を増やすことによって、成長を非人称の生へ、つまり不特定の生へ移すという（単細胞生物の）分裂である。（性行為は、のっけから自分のための貪欲な成長とは異なっている）

・（しかし有性生殖では）生み出された個体が、生み出す個体とははっきり異なっている。生み出す方の個体は、他者に贈与するように生命を、生み出した個体に贈与する。 p053

・高等生物の生殖行為は、ただ食べて自分の体重と力を増やす個体の単純な傾向との違いを際立たせてきた。・・・動物にとって生殖は、突然で熱狂的なエネルギーの浪費なのである。（個体が実行しうるなかで最も大きな浪費）

・人間の場合、この浪費は、ありとあらゆる形態の破滅を伴う。財の大量撲滅をもたらす。そして最終的には死の非理性的な奢侈と過剰に合流する。

#### 第7節 労働と技術による拡大、そして人間の奢侈

・人間の活動は、根本的に、生の全般的な動きによって条件づけられている。

・労働、つまり世界を変えるこの人間の活動は、生命体の総量を増やすことに向けられてきた。・・・技術は、生命が可能な範囲で行っている増加の基本的な動きを拡大する（もしくは継承する）ことを人間に可能にした。 p054

・十九世紀のヨーロッパの歴史は、産業施設を骨幹とする広汎な生命拡大の最もみごとな例である。

・だが人口増加の最近の緩慢ぶりはそれだけでもう[人口と経済発展という]現象の複雑さを露呈している。 p055

・最初の段階では、余剰エネルギーのかなりの部分を活用するのだが、次の段階になると逆に余剰を徐々に多く生み出すようになるのだ。 こうして生み出された余剰が、生の増大を困難にしているのである。

・ある点に達すると、拡大の伸びが反対の伸び、つまり奢侈の伸びによって無化されてしまうのである。・・・第一に重要になってくるのは、もはや生産力ではなく、生産されたものを贅沢に消費することなのだ。

・（一世紀にわたる人口増加と平和のあと）二つの大戦が、それまでの歴史で記録されたことのない膨大な富のオルギア（乱痴気騒ぎ）を執り行うことになったのだ。（だが二度のオルギアは生活水準の著しい向上をもたらした） p055-056

・（草食動物が植物より贅沢な存在であると同様に）人間は、すべての生物のなかで余剰エネルギーを強烈に、贅沢に、蕩尽するのに最も適した存在なのである。 p056

#### 第8節 呪われた部分

・この真実はたいへん逆説的であって、ふだん見てとれる真実とはまさに正反対である。逆説的な面は、繁殖の勢いが最も高まったところで繁殖の意義がどうやっても見えなくなるという事実によって強調される。 p056-057

・現代の状況では、富を富自身の役割へ、つまり贈与へ、見返りのない浪費へ、返そうとする根本的な動きを覆い隠すことに、すべてが躍起になっている。 p057

・機械化された戦争がたいへんな損害をもたらして、この根本的な浪費の動きを、人の意志に無関係の、いや敵対してさえいるものとして否定的に特徴づけてしまっている。

・生活水準の向上が奢侈への欲求として描かれることが全くない。（正義の名の下に、莫大な財産の奢侈への抗議にまでなっている）

・正義という言葉がその反対の言葉、自由という言葉の深い真実を隠してしまっている。・・・

自由はもはや、鎖を解かれたような危険な荒れ狂いではなくなっている。・・・危険がなければ自由などありはしないのだが、その危険を引き受ける意志を自由という言葉が持たなくなっている。

・富を蕩尽するように我々に求めている動きは、今や二様に変質させられて、呪うという感情に結びつけられている。 p058

・一方では、富の蕩尽は戦争という醜悪な形態をまとわされて、反感の対象になっている。他方では、贅沢な浪費の伝統的な形態が今や不正義とみなされて、贅沢な浪費への反感になっている。

・今日、この過剰は、これまで何らかの仕方でいつも持たされてきた呪われた部分という意味を我々の眼前でこのうえなく帯びているのである。

#### 第9節 《全般》という視点と《個別》という視点の対立

・浪費の動きは我々を活性化し、浪費の動きとしてこそ我々は存在しているが、しかしこの動きに恐怖を覚えて背を向ける事態は、当然、驚きをもたらはしない。

・この浪費の動きの帰結が最初から人を不安に陥れるからだ。（食はまさに浪費・・・食の真実を露に示すのは虎の表情）

・死は我々の恐怖になってしまった。・・・性活動は、死への嫌悪に、そして肉食への嫌悪に結びつけられている。 [肉の罪というキリスト教の表現に含意されているとの注あり？]

・こうした呪いの雰囲気は不安を前提にしており、不安というのは、生の繁茂が及ぼす圧力がないということの意味している。（不安が生じるのは、過剰感で緊張していないとき） p058-059

・不安は孤立あるいは個人という意味合いを持っている。・・・個人的で個別の視点においてのみ、不安は存在しうる。 p059

・不安は、生命を横溢させている人には意味がないし、本質的に横溢である生の全体にとっても意味がない。

・（現在の）状況の特徴付けているのは、全般的な状況に関する判断が個別の視点からなされているということなのだ。

・概ね、個々の生はつねに資源に不足して滅びる危険に直面している。これに対立しているのが全般的な生であって、その資源は超過状態にあり、死は無意味ということになる。（個別の視点に立つと、問題は資源の不足から提起され、全般的な視点に立つと、資源の過剰から提起される）

・もちろん、貧困の問題はどのようにしても残る。それに当然、全般経済学は、・・・まず第一に、発展させるべき増加を考察しなければならない。

・全般経済学は貧困を問うにしろ、増加を問うにしろ、それぞれの事態が必ずや直面する限界を考慮に入れる。そしてまた、過剰な存在の生に由来する問題の主要な特徴を考慮に入れる。

・（一例を簡潔に考える＝インドの貧困とアメリカの資源の余剰）インドでは、生命エネルギーの表出が避けがたい必然として目立っており（人口増加）、他方のアメリカでは産業の増大が避けがたい必然になっている。 p060

・現代世界の特徴は、人間の生によって生じる圧力が不均一になっていることなのだ。したがって、全般経済学はアメリカの富をインドに見返りなしに譲渡することを正しい操作として提案する。

・全般経済学は、インドの生の増大によって世界中に及ぼされる圧力—そして圧力の不均衡—がアメリカにもたらすことになる脅威を考察の対象にしていく。

・こうした考察は必然的に戦争の問題を頂点に位置付ける。人は、根本的な生の沸騰を考察してはじめて戦争の問題を明晰に検討できるようになるのである。

・戦争回避の唯一の解決策は、世界規模で生活水準を向上させることにある。

#### 第10節 全般経済学の解決策と《自己意識》

・全般経済学がまず明示しているのは、爆発へと向かうこの世界の特徴。（現時点で爆発の極に達している） p061-062

- ・呪うということがはっきり人間の生活に重くのしかかっているが、これはしかし呪うことが、（中略）爆発に向かう動きを食い止める力を持っていない限りのことなのだ。 p062
- ・呪うことを取り除くのは人間次第なのだ。だが呪うことの基底にある動きが意識にはっきり現れないのだったら、呪うことを取り除くことなどではしない。
- ・戦争の大惨事への対処策として「生活水準の向上」しか提案できないというのはなんとも失望させる話のように思える。（この対応策は浪費への欲求に応えようとしているが、その真実においてこの欲求を見ようとしないう意志が、この対応策には密着している）
- ・この対応策は、広く受け入れられる唯一の解決策。（この解決策の途上で、真実からの逃避が逆効果になって、真実を認識するよう人々をしっかりと促す）
- ・人間の精神は、消極的でなく大げさで独断的な解決策が出されると、結局、それに反感を覚えるように見える。そして逆に、人間の生をあえてこの生の次元へゆっくり導こうとする意識の模範的な厳格さに対しては、これとつながりを持っている。 p063
- ・この論文が用意するのは最初から自己意識なのである。人間がその歴史的形態の連鎖を明晰に見ていくなれば、必ずや実行に移すはずの自己意識なのである。
- ・全般経済学は、まず歴史のデータの解説から出発して、現代のデータに意味を与えていく。

## 第二部 歴史のデータI 蕩尽の社会

### 第1章 アステカ人の供犠と戦争

#### 第1節 蕩尽の社会と企業の社会

- ・浪費という現象になって現れる動きは、元来、画一的ではないという原則。 p067
- ・人間を対象にした学問は、それが立ち上げられた時の歴史的状況に起因する展望を今やはっきり修正する必要がある。・・・成長のときの真面目な人類が文明化して、温和になるのだが、しかし、真面目な人類はこの穏やかさが生の価値だと混同しがちである。・・・その認識は十分な自己認識になりえない。 p068
- ・自分たちが完全な人類とみなしているものに自ら騙されている。この場合の完全な人類は労働状態にある人類の姿であり、労働の成果を自由に享受せずに、ただ働くために生きている人類なのである。
- ・（民族誌学などが紹介する比較的無為な人のおかげで）自分たちに欠落しているものを推し測ることができる。

#### 第2節 アステカ人の世界観における蕩尽（アステカ人：スペイン占領前のメキシコ先住民族）

- ・（アステカ人は）精神の面で我々と正反対のところに位置している。 p069
- ・（文字も天文学の知識も持っていたが）彼らの（文明による）重要な作品は役に立たないものばかりだった。
- ・我々の思考のなかでは生産が重要な場所を占めているのに対し、彼らの思考のなかでは逆に蕩尽が重要な位置を占めている。（働くことではなく、供犠を行うことに心を配る）
- ・アステカ人は、太陽自身からして自分を供犠に投じていると見ていた。（神は、燃えさかる火のなかに身を投じることによって神になった） p070  
（修道士によるこの神話の報告の記述）
- ・「風は神々（太陽と月にならなかった神々）から心臓を抜き取って、それで持って、太陽と月、この赤子のような新星の生命に活力を与えた」 p073
- ・以上の神話は以下の信仰とつなげて理解されるべきである。すなわち「心臓と血を持つ人々とそれを食べる太陽が存在しうるようにするために」人間、そして戦争も生み出されたという信仰である。
- ・（この信仰は）蕩尽の極限的な価値をはっきり意味している。

#### 第3節 メキシコの人身御供

- ・メキシコ人の人身御供ときたら、宗教儀式の残酷史を頂点へ至らしめている。 p074



- ・（神官たちは）生贄を石の祭壇の上に横たえて、・・・脈打つ心臓を取り出して、太陽へ掲げるのである。
- ・大多数の生け贄は戦争の捕虜だった。それゆえ、太陽の生命に必要な戦争という考えは正当化された。戦争は、征服ではなく、蕩尽という意味を持っていた。（戦争がなくなると太陽が地上を照らすこともなくなる）  
（生け贄にされたある捕虜の話）
- ・毎年、神事のための生け贄は途方もない数にのぼった。二万という数まで出されている。p075

#### 第4節 供犠執行者と生け贄の親密な関係

- ・アステカ人は、供犠で死んでいく人々に対して奇妙な振舞を遵守した。（人道的に扱い、望む食べ物と飲み物を与えた）p077
- ・死は突然で予期しえないものであらねばならなかった。（しかし生け贄たちは運命を知らないわけはなかった）  
（供犠前の様子の記述）

#### 第5節 戦争の宗教的性格

- ・捕虜の供犠は、（戦争という）死の危険を引き受けるという条件と切り離すことができない。メキシコ先住の人々は、彼ら自身が死の危険に直面するという条件でのみ、供犠での流血を引き起こしていた。p079
- ・産婆が赤子のへその緒を切り落とすときに、こう言うのだ。「おまえの義務、それは敵の血を太陽に飲ませること」  
（産婆の言葉の記述）
- ・捕虜を連れ帰った兵士は、神官と同じように神事に加わっている。・・・（生け贄の）一杯目の血は、神官によって太陽に捧げられた。p080
- ・生け贄の遺体は生け贄奉納者に返される。（焼かれて招待客に食べられる。奉納者は生け贄を自分の分身とっており、食べない）p081
- ・（兵士が戦場で倒された場合）彼の死は、食べ物を欲する神々の腹を満たすことになる。
- ・「あなたは、彼らの血と肉体を太陽と大地に食料として捧げるというただそれだけの目的で、彼らを戦場へ送り込んだのだから」（兵士のための神への祈りの言葉）
- ・満腹になると、太陽は自分の宮殿で死者たちの魂を祝福する。戦死者たちは供犠の生け贄たちと一緒に、宮殿にいるのだ。p081-082

#### 第6節 宗教の優越から軍事的効率の優越へ

- ・彼らの社会は軍事的社会ではなかった。宗教こそがいつになっても彼らの活動の謎を解く明白な鍵であり続けた。p082
- ・それは（敢えてジャンル分けすれば）戦士社会：人に誇示するような戦闘の在り方が幅をきかず社会。彼らは戦争と征服のための理性的な組織など知らなかった。p082-083
- ・真に軍事的な社会とは、一種の企業社会。そこでは戦争は帝国の勢力拡大、秩序だった発展という意味を担っている。
- ・しかしアステカ人においても、戦争行為が極端に重視されたために、顕著な変化が生じた。その変化とは、企業の理性へと向かう（人間性を新たに開始させる）変化であり、これは蕩尽の残酷な暴力に対立していた。（王は宮殿にとどまっていた。）これは王の代理の供犠なのだ。（内部の暴力が自分への緩和作用のおかげで他人に向けられてしまうのである）
- ・暴力の動きは、社会の内部にも外部にも一方的に向けられはしなかった。対内的な暴力と対外的な暴力が合体して、何も保存しないという経済をつくりあげていた。
- ・王の代わりに一人の捕虜を供犠に処することは、王の供犠の陶醉に対する必然的などとは言わないまでも、明白な軽減措置であった。p084

#### 第7節 供犠あるいは蕩尽

・供儀は、我々が奴隷のように使用して俗化させてしまったものを聖なる世界へ返す。奴隷的な使用は、根底的に人間主体と同様の性質であるものを、・・・物へ（客体へ）変えてしまうのである。

・（供儀においては）動植物が物になってしまったかぎりにおいて、破壊しなければならない。破壊は、人間と動植物との間の功利的関係を否定する最良の手段である。 p085

・だが破壊が全面消滅にまで至る例は少ない。供え物を食べること、つまり聖体拝領（イエスの血としてワインを飲む等）が、食物の通常の摂取に還元できない意味を持つということで十分なのだ。

・儀式は、・・・供儀執行者と生け贄との間の内的な融合関係を回復できれば、それで十分メリットになる。

・捕虜の労働を利用している人は捕虜も自分と同じ人間だとする絆を断ち切っているのである。・・・他者を一個の物つまり奴隷にするためには、誰も、自分と他者とのつながりから離れて、自分で自分自身に物の枠を与えなければならないのである。

・奴隷も主人も完全に物の次元に還元されるわけではない。・・・他人にとってこの奴隷があいかわらず人間であるにしても、この奴隷は、一人の人間が一個の物にしかかなりえない世界に存在しているのである。 p086

・曇りの日は《物を物本来の姿に還元させる》ような印象を与える。これは明らかに間違いだ。私の眼前に存在しているものは、結局のところ、宇宙に他ならない。

・奴隷状態も、世界のなかに光の不在をもたらす。つまりそれぞれの物が、その用途に還元されて、互いに分離してしまう状況を、もたらすのだ。 p087

・光やその壮麗な輝きは、生の内奥性を引き起こす。内奥性とは、生命の根底的な在り方のことだ。主体は自分のことをこの内奥性に等しいと感じ、なおかつ宇宙の透明性とも感じている。

・《存在するもの》を物の次元へ還元することは奴隷状態だけの問題なのではない。・・・労働が世界に導入されたとたん、すぐに内奥性が、欲望の深さが、欲望の自由な荒れ狂いが、理性的な連鎖に取りかえられてしまったのだ。

・理性的な連鎖とは、今現在の瞬間の真実がもはや重視されず、諸操作の後々の成果が重視される、そういう未来時とのつながりのことである。

・最初の労働は物の世界を築いた（古代人の俗なる世界）。物の世界が創りだされるとすぐに、人間自身がこの世界の物の一つになってしまった。

・この墮落をどの時代の人間も回避しようと努力した。人間はその第一歩から、不思議な神話や残酷な儀式を通して、失われた内奥性を追い求めていたのである。 p087-088

（行あき）

・いつも宗教で問われていたのは、現実の次元から、つまり物の貧しさの次元から、人間を引き抜いて、神的な次元へ返す

ことだった。人間が用いる動植物が内奥の世界の真実へ返されるのである。（動植物との聖なるコミュニケーションが人間を内面の自由へ返していく） p088

・深い自由の意義は破壊のなかで示される。破壊の本質とは、役に立つ制作物の連鎖のなかに留まりえたものを利益なしに蕩尽することにある。

・利益追求の活動の世界に供え物をつなげている絆が断ち切られるだけなのだ。（聖別された供え物が現実の世界に戻されることはない。この原則のおかげで荒れ狂う世界へ道が開かれる。）

・内奥の世界は現実の世界と対立している。 p089

・客体が物として客体自身と一致している場合にのみ理性は働く。物として存在する諸客体を識別して認識するときのみ理性は働く。（主体の世界は夜なのだ。理性の眠りのなかで化け物たちを生み出す。）

・主体は、未来時を気にかけるようになるとすぐに、自分の領野を離れて現実の次元の、物として存在する客体に、従属するようになる。（主体は、労働に縛られていない限りにおいて蕩尽であるのだから。）

・《存在するであろうもの》にもう気を配らなくなり、《存在するもの》に心を向かわせるならば、何かを大切に保存しておくどんな理由を持つというのか。・・・明日への配慮が取り除かれ

るとすぐに、この無益な蕩尽が、私を快適にするものになる。

・節度なく蕩尽すると、内奥の次元での私の存りようを他の人々に明示するようになる。蕩尽是、分離した諸存在が交わりあおう方途なのだ。 p090

・供犠に参加する人々は、危険な状態にある。（しかし、供犠の制限された形式のおかげで、彼らは合法的に身を守ることができる）

・供犠は熱なのだ。この供犠の熱のおかげで、・・・人々は失われた内奥性を発見できるようになる。（暴力は供犠の原則だが、制限される。人々を結合し共同の物を維持する配慮が優先される。） p091

・共同体だけは破壊から守られている。暴力に委ねられるのは生け贄なのだ。

## 第8節 呪われ、かつ神聖視される生け贄

・生け贄は、役に立つ富の山から取り出された一個の剰余物である。・・・選ばれるとたちまち生け贄は、暴力的な蕩尽を約束された、呪われた部分になる。 p091-092

・（生け贄は物であるため）破壊して生け贄から物の性格を奪い、有用性を永久に取り除いたときにはじめて、生け贄は現実の次元から引き離される。 p092

・聖別から死までのあいだに、生け贄は生け贄奉納者たちの内奥性のなかに入っていき、彼らの蕩尽に加わる。生け贄は彼らの一員になるのだ。

・生け贄だけが、祭りの動きに究極まで運ばれる・・・生け贄だけが現実の次元から完全に離れる。

・供儀執行者は、・・・神聖であるにすぎない。供儀執行者には未来というものが重くのしかかっている。未来とは、物としての彼の重さのことなのだ。 p-092-093

・（供儀に処されたメキシコ人の人々の何人かは神々に捧げられることを「名誉とみなしていた」のだろう。しかし彼らの供儀は自発的ではなかった。）供儀は不安と熱狂の混合物なのだ。 p093

・熱狂が不安を上回ったのだが、これは、熱狂の現象を自分たちの外へ、他部族の捕虜に、差し向けるという条件でのことだった。

・だからといって儀式の意味を変えはしない。・・・限度を越えた過剰、しかもそれを蕩尽することが神々にふさわしいと思われる過剰、これが唯一の価値だった。 p093-094

・人々はこの代償を払って、墮落を免れていた。現実の次元の食欲さと冷静な打算によって彼らのうちに入り込んでいた重みを取り除いていたのである。 p094

## 第2章

### 第1節 メキシコ社会における誇示的贈与の重要性

・人身の供儀は浪費のサイクルのなかの極端な場合でしかない。 p095

・これみよがしの浪費に身を任すことは、《首領》、すなわち莫大な富を持つ主権者の職務の一つだった。もっと古い時代には、表向き主権者自身が供儀のサイクルの到達点になっていた。

・結局、彼の権力のおかげで彼は守られることになる。・・・自分の命の代わりに自分の富を供与していた。彼は贈与し、遊ぶ。そうしなくてはならなかったのだ。 p096

・祭りでは生け贄の血だけでなくより広く富も流出したのだ。（王だけでなく、貴族も商人も）各人が自分の力の及ぶ範囲で富を供出していた。 p096-097

・捕虜の獲得あるいは購入によって、戦士と《商人》は供儀の生け贄を提供していた。・・・祭りの宴会は莫大な出費になった。公的な祭りは、個人的に金持ちによって、とくに《商人》によって、実施されていた。 p097

### 第2節 金持ちと儀式の浪費

・メキシコの《商人》は、安全でない地方へ自ら遠征隊を送り込んでいた。

・（ヨーロッパ人の価値判断は、もっぱら利益を重視するが）メキシコの大《商人》は利益重視の規則を性格に遵守していなかった。 p098

・彼らの交渉は値切ることなしに行われ、交渉者の名誉を保っていた。（アステカ人の《商人》

は) 贈与による交換を行なっていたのだ。《商人》は自分の《首領》から贈与として富を受け取っていた。そしてこの《商人》は遠征先の地方の領主たちにこの富をプレゼントしていた。(受け取った) 地方の大領主は、《商人》から王に捧げてもらおうと、急いで別のプレゼントを渡した。

- ・この慣習において交換される品は物ではなかった。(この品の贈与は栄光の印であった) p099
- ・人は贈与することで、自分の富と自分の幸運(自分の力)を表明した。
- ・《商人》は贈与する人だった。(商人が金持ちとみなされたりしたならば、上層の商人すべてと領主のために祭と宴を開いた。彼は、消費せずに死ぬことを低劣なこととみなしていた。)
- ・その消費は、「彼に贈与した神々の恩寵を誇示して、自分の人格の光輝をさらに輝かしく見せる」そんな消費だった。
- ・(珍しい例) 商人によるパンケツアリストリと呼ばれる祭の饗宴。破産を招くほどの費用がかかった。多くの招待客を募り、一財産に相当するプレゼントを受けた。・・・(贈答品のうち) 高価なものは将軍や高位高官の人へ渡った。(奴隷を何人も供儀に投じ) 主権者も「商人」の家で生け贄の肉を共同で食するのだった。p099-100
- ・贈与による交換は、現代の商業活動と正反対である。p101

### 第3節 北西アメリカのインディアンの《ポトラッチ》

- ・古典経済学は初期の交換を物々交換だと想定した。交換という獲得の様式が起源においては獲得への欲求ではなく、正反対の損失あるいは浪費への欲求に応えるものだったなどは古典経済学にはどうにも考えられないことだった。
- ・メキシコの《商人》たちは、・・・贈与の規則的な連鎖という逆説的な交換システムを実践していた。この《栄光の》習慣こそが、交換の古風な体制だったのである。p101-102
- ・アメリカ北西部のインディアンたちによって、今もなお実施されているポトラッチは、この贈与の交換システムの典型的な形態である。p102
- ・多くの場合ポトラッチは、部族の長が対抗部族の長に莫大な富を贈呈する儀式的な贈与。その目的は、対抗部族の長を辱めたり挑発したり義務を負わせたりすることにある。受贈者はこの屈辱を拭って挑発に応じなければならない。・・・(返礼は)受けた贈与よりもいっそう気前のいい新たなポトラッチによってしか可能にならない。p102-103
- ・贈与はポトラッチの唯一の形態ではない。対抗部族の長は、富を厳かに破壊するというやり方で挑まれることもある(受贈者の神話上の祖先に捧げられる)。(十九世紀においてもトリングト族の長は対抗部族の長の前で) 何人もの奴隷の喉をかき切って殺すということをやった。・・・より多くの奴隷の処刑によって返された。(村の焼き払い、カヌーの破壊、紋章入り銅塊の破壊と海への投棄なども行われた。)

### 第4節 《ポトラッチ》の理論(一)：《権威》の《獲得》に貶められた《贈与》の矛盾

- ・(マルセル・モースの『贈与論』の公表後) ポトラッチの制度は好奇心の対象となった。(その好奇心には、いかがわしいものもあった) p104
- ・(経済という言葉が、全般経済学という還元できない動きを意味している限り) 経済の原則と共通した原則を宗教的な活動に見出すことができる。
- ・もしも世界全般において、最終的な問題が、有益な富を散財することではなく獲得することにこそ関係しているならば、ポトラッチなど存在しないだろう。
- ・ポトラッチは奇妙な制度だが、また身近でもある制度。我々の多くの活動がポトラッチと同じ意味を持っている。我々の生活空間のなかにも、・・・有用性に還元できないエネルギーの流れがある。p104-105
- ・ここで問われているのは、余剰を消費するという問題である。我々は贈与するか、失うか、破壊しなければならない。(だが) 贈与は、獲得の意味を持たないのだったら、狂気の沙汰になるだろう(我々は贈与する決断を下さなくなるだろう)。
- ・贈与することは権威を獲得することにならねばならないのである。贈与は、贈与する主体を乗り越えることを長所としている。主体は、自分の長所、つまり自分にその力のあったことを、自

分の富（彼固有の権威）とみなす。彼は、富を軽蔑することで富んで行く。

・（しかし）孤独のなかで、静かに客体を壊しても、そこからはいかなる権威も生じない。p105-106

・主体が一人の他者の前で客体を滅ぼしたり、贈与したりすると、その主体は、じっさいに他者の目には、・・・権威を持つように見えてくる。p106

・ポトラッチで得られる富は、他者が蕩尽によって変化してはじめてじっさいに存在することになるのだ。

・ポトラッチの模範的な長所は、自分から逃げていくものを掴むことができるという人間の可能性にある。つまり宇宙の際限なき運動を、自分の限界と結合できるという人間の可能性にある。

（注のなかの説明）ポトラッチこそはバタイユにとって全般経済学の原則の起源。だが、「これらの原則はポトラッチのなかに解決できない要素を残してもいた」。エネルギーの浪費は物とは反対の事象だが、「浪費は物の次元に入って、物に変えられてはじめて考察されるようになる」。p107

#### 第5節 《ポトラッチ》の理論（二）：贈与の外見上の無意味

・贈与は、全般経済学の視点からすると、何も意味しない。贈与者にとってしか浪費は存在しない。贈与者が贈与で失ったのはただ表向きのことではない。

・（贈与者は贈与したおかげで受贈者の目には権威と映るが、）受贈者はこの権威を破壊するために贈り物を贈与者へ新たに返さねばならない。この対抗関係は、より膨大な贈与という見返りをもたらす。p108

・贈与することは失うことである。しかし明らかにこの損失は、損失した人に儲けをもたらす（贈与は逆のものになる）。

・（しかし）ポトラッチのこの矛盾は（取るに足らない面であり）、人の目を欺いている。（なぜなら）「ポトラッチは返礼されなくなるということが理想」だからである。ポトラッチでは贈与物の利得は儲けの欲望とはまったく合致していない。（受け取るとは、より多く贈与する義務をもたらすが、最終的には、その義務を取り除かねばならない）

#### 第6節 《ポトラッチ》の理論（三）：地位の獲得

・たしかにポトラッチは損失への欲望に限定されはしない。しかし贈与者にもたらされるのは返礼のための贈与物の避けがたい増大なのではない。最後に勝利する者が持つ「地位」なのだ。p109

・威光、栄光、地位は権力と混同されてはならない。ただし、威光が権力になることはある。

・権力と、贈与で物を失うことのできる権威との一致は根本的だとさえ言うておかねばならない。

・地位は、・・・何よりも、自分自身を全面的に賭けに贈与してしまった人間の所産なのである。

・（栄光というものは、）相手の地位を奪ったり、財産をわが物にする力とは別の事態なのだ。闘争の情念に必要な激しい熱狂の衝動、惜しみないエネルギー浪費の衝動の表出にほかならない。p110

・戦闘は、（打算を上回ったままであり続けるとき）その意味で栄光だと言える。（人が戦争と栄光の意味を捉えられずにきたのは、生命資源の膨大な消費による地位獲得に関係づけられていないから）

・ポトラッチこそがこの地位獲得の最も理解しやすい形態なのである。

#### 第7節 《ポトラッチ》の理論（四）：初期の根本的な法則

・財産占有それ自体と正反対であり続けるにしても、ポトラッチの最終的な目標はやはり獲得なのである。

・ポトラッチの動きから次のような法則を導き出せる。

一 社会が恒常的に持つ余剰資源は、ある地点、ある時期において、全面的占有の対象にはなり

えない（有益に使用できない）。しかし、この余剰資源の浪費それ自体が獲得の対象になってしまう。 p111

一 浪費において占有されるのは、浪費者の威光なのだ。この威光が、・・・浪費者の地位を決定する。

一 社会の内部における地位は、一個の道具や畑のように占有されうる。（地位が利益をもたらすとしても）地位の原則は浪費によって決定される。余剰ゆえにもはや誰からも獲得されなくなった資源を決然と消費する、この消費によって決定されるのだ。

#### 第8節 《ポトラッチ》の理論（五）：曖昧さと矛盾

・人間が保持する資源はある程度のエネルギーに過ぎないのだが、人間は、そのエネルギーを成長の諸目的にいつも差し向けるということはできない。（人間の成長は無限ではないし、絶えず持続しているわけでもない）

・人間は余剰を浪費しなければならない。しかし、浪費しているときにすら獲得したいと食欲に欲し続けている。浪費をも獲得の対象にしてしまうのだ。 p111-112

・資源を浪費した人が獲得した地位は存在し続けている。（資源の有用性の）否定を浪費とは逆向きに、つまり有益に、活用しているのである。 p112

・人間は、有益で捉えやすい事物のなかに、自分に必要で、成長するのに（あるいは存続するのに）役立ちそうなものを見出す。しかし、他方で、喫緊の必要性に人間が縛られなくなると、この《有益な事物》は人間の欲求を全面的に満たすことができなくなる。人間はそうすると捉えがたきものを追い求めようとする。自分自身と自分の財を無益にも用いること、つまり遊びを追い求めるようになる。（人間は、捉えがたいものとして欲していた当のものを捉えようと、有益性を拒んでいたものを有益に用いようと試みだす）

・地位とはこのように歪んだ意志の所産なのである。ある意味で地位は物の反対側にある何かである。 p113

・（地位を築いているのは聖なるものであり）本質的に聖なるものを、一個の物のようにみなすのは、偏見なのだ。

・曖昧さが、俗なる操作の欲求を巻き込んで、聖なる欲望の暴力からその意義を奪い、この暴力を露骨な喜劇に変えてしまう。

・こうした妥協が我々の本性のなかで生じていて、ごまかし、間違い、畏、搾取、怒りの連鎖をもたらすのだ。

・地位においては浪費による消失が名誉の獲得へ変えられてしまうのだが、さらにまた地位は、思考の対象を物へ還元する知性の活動に呼応している。 p113-114

・ポトラッチの矛盾は、より根源的に思考の活動の局面でも見てとれる。供儀においてにしるポトラッチにおいてにしる、・・・我々が追い求めているのは幻影なのだから。 p114

・我々は、当然のこと、この幻影を捉えることができない。ただむなしくこの幻影を詩だとか、情念の深さあるいは内奥（ないおう）だとか呼ぶしかできないのだ。我々は必ず誤る。なぜならば、この幻影を捉えようとしているからだ。

・我々の認識作用は、対象を、従属的で操作されるがままになる事物へ還元してしまう。だからこの認識作用が解消してしまわないかぎり、我々は認識の究極の対象に到達することができない。

・だれも同時に認識することと破壊されずにいることを両立させることはできない。同時に、だれも富の増加と蕩尽を同時にやっつけることはできない。

#### 第6節 《ポトラッチ》の理論（六）：奢侈と貧困

・際限のない生命の世界から切り離された個々人が生命に寄せる欲求が利害なるものを決定しているのであり、いかなる活動もこの利害に関係づけられている。しかし、それでもやはり生命の全般的な動きが、個々人の欲求を越えて実現されている。 P114-115

・強者は弱者を脅かして金品を奪い、あからさまに欺瞞に満ちた報酬で弱者を搾取している。しかしだからといって、全体の結果に変化は生じない。全体のなかでは、個人の利害はたわいない

ものに転じているし、富者の虚偽が真実に変貌させられる。 p115

・なぜならば、結局のところ、成長あるいは獲得の可能性がある一点で限界を持つなかで（?）、孤立したどの実存も目標にしている対象が、すなわちエネルギーが、必ず解き放たれるからなのである。それも、まさに虚偽の覆いを被されたままで解き放たれるからなのである。

・人間たちは結局のところ嘘をつくということなのだ。このエネルギーの解放を利害に関係づけようとするということである。

・個々人が蓄積した富は原則として破壊へ捧げられる。この破壊を実施する個々人はこの富を、この地位を、真に所有しているわけではない。

・原初的狀況では富は、在庫の弾薬と常に似ており、富の所有ではなく、富の無化をはっきり表している。このイメージは、地位というものの滑稽な真実、つまり爆薬という真実を表している・・・高位の人は原初においては一人の爆発性の個人に他ならない。 p115-116

・彼は、爆発を避けようとする。少なくとも延期させようとする。・・・人々の前で真実（彼の爆発性の本性）を肯定し続けているにもかかわらず、この真実から逃避しようとしているのである。

・彼はやがてこの虚偽のなかで没落していく。そして地位は、搾取のための方便に墮落していく。利益のための恥知らずな源泉に転落していく。（こうした嘆かわしい事態があっても横溢の動きは絶対に中断されない。

・富の動きは、人間の意図にも、ためらいにも、嘘にも関心をはらわずに、ただゆっくりと、あるいは突然に、エネルギー資源を表出させ、蕩尽する。

・一見してポトラッチは、富の蕩尽をうまく成し遂げていない。（富の破壊は規則のように定められてはいない） p117

・ポトラッチの執行における損失は贈与者だけに限られている。全体として見れば富は温存されている。

・（ポトラッチが供儀と同じような行為に達することはめったにないが、それでもポトラッチは）生産的な消費から人を奪還する一制度[供儀の制度]の補完的形態なのである。

・その理由：一般的に供儀は、有益な産物を俗なる流通から切り離す。ポトラッチによる贈与は、原則として、最初から無益な物品を動かしているのだ。つまり原始的な贅沢品産業がポトラッチの基底にはあるということである。この産業は、人間が行いうる労働量に相当する資源をあからさまに浪費する。

・贅沢品とは、アステカ人では、「外套、ペチコート・・・豪華な色の羽織り、宝石細工・・・」である。アメリカ北西部では、カヌーや家が壊され、犬や奴隷の喉がかき切られる。（これらは有益な富だ）[しかし]主として贈与は贅沢品である。

・ポトラッチは奢侈の際立った表現であり意義深い形態だと言うことさえできるだろう。 p118

・原初的な形態を離れても、奢侈は、地位の創造というポトラッチの機能的な価値を保持している。奢侈は今でも奢侈を誇示する人に地位をもたらしているし、豪華さを必要としない高位の地位など存在しない。

・こうした人々の下劣な打算がいたるところでより多くの富によって乗り越えられている。こうした人々の不手際を越えて、富のなかで輝くものが太陽の光輝を継承し、情念を求めているのだ。

・富のなかでの輝きとは、この輝きを貧しさへと転じてしまった人々が想像しているようなものではない。生命の広大な世界が横溢の真実へ帰っていくことなのである。この真実こそが、この真実を別なものに取り違えた人々を破壊する。

・少なくとも言えることは、富の現在の形態は解体していき、富の所有者だと思っている人々は人類の笑い草になっていくということだ。

・現代の社会は巨大な偽造物である。（富の真実が貧しさへ陰険に移されているのだから）

・現代の真の奢侈も、根源的なポトラッチも、貧しい人のものになっている。

・本当の奢侈は、富への完全な軽蔑を必要としている。労働を拒みながら、一方で自分の生を際限のない破滅の輝きにし、他方でその生をもって、労働にふける富裕者の欺瞞を暗黙のうちに軽蔑している人の陰気な無関心を、本当の奢侈は必要としている。

- ・もしも、ぼろを着た人々の輝きがないのならば、彼らの無関心で陰気な挑発がないのならば、軍隊による搾取、宗教上の神格化、資本の横領を越えたところに、富の意義を、富が予告する爆発的なものを、溢れでるものを、誰ひとり見出せなくなるだろう。p118-119
- ・嘘は、結局、生命の横溢を反逆へ差し向ける。 p119

以上